

現地理解・多文化理解教育の取り組み

—— マレーシアと日本を比較することで ——

前ペナン日本人学校 教諭

長野県駒ヶ根市立赤穂中学校 教諭 春日 俊 宏

キーワード：現地理解、多文化理解、総合的な学習の時間

1. はじめに

マレーシアは、面積が日本とほぼ同じ大きさである。タイ王国と接するマレー半島とインドネシアと隣接するボルネオ島とで構成されている。人口は約3000万人。その中で、マレー系、中華系、インド系、そのほかの先住民民族などによって構成されている多民族国家である。様々な言語、宗教などお互いの考えを尊重しあいながら、協力して生活をしている雰囲気を感じる。このマレーシアは、近年日本人が移住したい国の1位を獲得し、MM2H（マレーシア・マイ・セカンド・ホーム）の制度を利用して、ロングステイをする日本人が増えてきている。

私が勤務したペナンは、首都のクアラルンプールから飛行機で1時間の距離にあり、「東洋の真珠」「東洋のエメラルド」と呼ばれる国際的な観光地であり、近年は中東の人達のリゾート地の1つとなっている。2008年にマラッカとともに世界遺産に登録されたジョージタウンは、イギリスの植民地時代の建物だけでなく中華系、インド系などの建物も多数あり、それぞれの文化を融合した街並みが、今なお残る場所である。

観光地の一つであるガーニードライブ沿いには、大きなショッピングモールやホテルが建てられているが、島の西側や南側にはやしの木々の間に昔ながらの高床式の家が点在し、モスクからはアル＝クルアーン（コーラン）が聞こえてくる閑かなカンボン（村）がある。しかし最近では、この閑かなカンボンにも開発の波が押し寄せ、あちこちに大きなコンドミニアムやビルが建ち始めている。

島の対岸バタワースとは約14kmのペナンブリッジで結ばれており、半島の各都市への南北縦断高速道路とも直結している。2014年には約24kmある東南アジア最長のペナン第2ブリッジが完成し、以前はバイクを利用して人々が車に乗り換え、街中は車の量が増え、渋滞緩和をするために一方通行が増えてきている。

ペナン州の在留日本人は約2,800人で、そのほとんどは島内に居住している。島内のバヤンレパスや対岸のバタワース地域、ペナン州北側のケダ州のスンガイ・ペタニ、アロースター、クリム地域に工業団地があり、これらの地域に約250社の日系企業が進出している。

2. ペナン日本人学校について

ペナン日本人学校は、全校児童・生徒157（2016.3月現在）名の小中一貫校である。小学部の教員が中学部の授業を担当したり、中学部の教員が小学部の授業を担当したりして、全職員で全児童生徒を見守っていくアットホームな学校である。運動会では、中学生がリーダーとなり紅白に分かれてそれぞれの組で応援合戦のダンスを行うが、小学1年生にどのように教えたらいのかを仲間と意見を交わし、戸惑いながらも我慢強く教える姿や協力し合う姿が毎年のように見られる。

授業は日本の教育課程を基本にして、その上に海外の特色を生かした英会話の授業が小学1年生から加わり、小学部は週2時間、中学部も英語の授業以外に週1時間行っている。また体力不足が懸念されるため、英会話と同じように現地採用の講師が付き、担任とともに週1時間の水泳の授業も行われている。さらに、小学部2年生から週1時間、国語とは別に書写の時間が設けられ、海外でありながら日本の文化を大切にしている実践もあった。

3. 総合的な時間での取り組み ～現地理解教育の実践～

ペナン日本人学校の学校教育目標は「PJSかがやきプラン」で「かんがえる子」「がんばる子」「やさしい子」

「きょうりよくする子」であった。「協力する子」の中に「日本・郷土を愛する」「マレーシア・ペナンを知る」がある。勤務1年目は小学部6年の担任として移動教室（日本で言う修学旅行）でタイ国境に近い「ランカウイ」に引率をした。マングローブの植林やサイチョウの観察、カプトガニに触れる機会などマレーシアでしかできない自然体験をした。勤務2年目に、小学部5年を担任し移動教室でボルネオ島の「クチン」へ引率をした。引率の機会を生かし、「マレーシア・ペナンを知るために、日本を比較対象として利用し、体験したことや見てきたことをまとめることで、マレーシア・ペナンについて理解を深めることが出来るだろう」という研究テーマを持ち、研究を進めることにした。

(1) 移動教室の事前学習

①日本のホテルにはない特別な矢印を発見

移動教室の下見に行った際に、天井に矢印が記されていた。イスラム教徒の多いマレーシアのホテルの天井には写真のような矢印があった。矢印は聖地エルサレムを指している。児童に日本では見ることがない特別な矢印を意識させるために、下見報告の写真の中に入れてみた。すると、児童の中から疑問に感じる声が上がった。そこから、日本との違いを感じたり、マレーシアの文化に気づく児童もいた。

—児童と教師のやりとりから—

T：ホテルの天井には、日本のホテルには無いものがありました。

それは何でしょう？

S1：なんだろう。

S2：どんなもの？写真は？

T：それはこれです。（右の写真）

S3：あ、お祈りする時の方向だ。

T：そうです。ホテルの天井にあるので、宿泊した際に、部屋で見つけてみましょう。



②クチンについて調べてみよう。（探れ！クチンワールド）

クチンの食べ物と日本の食べ物とを比較して、おいしそうだったとのイメージを持つ児童が多くみられた。ある児童はチャーシューミー（ドライ）はチャーシューを薄く切って、やきそばのようなものに入れて味付けしたもの、肉まんは日本に比べて大きく肉がジューシーである、チキンライス（鶏肉がやわらかで、おいしく、しょうが汁のたれに鶏肉（蒸したもの）をつけて食べるものなどいくつかの食べ物を紹介した。さらにチャーシューミーについて調べた児童が同じような味をクラスの人には好きなのか、日本のラーメンの味で調べて比較したいと考えてアンケートを行った。クラスの多くの児童がみそ味が好きだと答えたため、甘いしょうゆ味が好きな児童は少なかった。しかし、実際の見目は焼きそばに似ているため、味だけでなく、見た目でもイメージを持つ児童も多くいたが、多くの児童は、日本の味を思い出す良い機会になった。



チャーシューミー

(2) 移動教室報告会（クチン新聞づくり）

①印象に残った所やおすすめの所を紹介しよう。（クチン新聞）

クチン新聞では、多くの子が国立公園で見たマレーシアでしか見ることができない動物（オナガザルやヒゲイノシシ、テングザルなど）を見て驚いた時の感想を書いていた。また、オランウータン保護センターも見学した。親に見捨てられたオランウータンを保護し、自然回帰のプログラムを組んで取り組んでいる施設だった。朝夕にエサを与えるところを見学できるため、その時間に待っていたが、時間内には現れず自然の動物は動物園のようにいつでも見られるわけではないことを感想に書いている児童もいた。またサラワク州の文化村の見学では、吹き矢を体験したり、洪水やワニに襲われないために高床式にしている現地の家を見学し、長年の工夫から作り出されている



生活の知恵を知って驚いていた。児童らは移動教室中も一生懸命にメモを取るなど意欲的に活動に取り組んでいた。それは帰校後に行われる保護者向け発表にむけて「初めて見たり聞いたりする人にどのように伝えたら良いか」と意識したためと考えられる。

②保護者向け発表会（クチン移動教室報告会）

移動教室を終えた時、今回学んだことを保護者向けに、発表会を行った。「行ったことのない人へ説明をして、クチンのことがわかってもらえるようにするにはどのようにしたらよいか」と児童に投げかけたところ、「日本やペナンなど見たことや経験したことがあるものを比較させてみたらわかってもらえるのではないかと答え、発表用の原稿を制作した。発表会では、一人ひとりの内容をテレビに映し出し、聞く人にもわかりやすく丁寧に説明を行った。特に紹介する場所を「自然と動物の宝箱 バコ国立公園」や「昔の文化の残る場所 サラワク文化村」などのキャッチフレーズで紹介したことは、保護者から好評であった。保護者は「写真を使うことによって、印象が鮮明に残った。質問の形式で雰囲気も活発になった。子どもたちの感想や発表を見るのは面白かった」や「子どもたちの発表には、親の知らないこともあり、勉強になりました。子どもたちも大勢の前で発表することで、良い経験になったのではないかなと思います。クイズ形式なのは、見ている側にも緊張感がありよかったです」など移動教室を通し現地理解教育の学習成果を理解してもらえる良い機会となった。



4. 現地理解教育・多文化理解教育の取り組み

(1) インターナショナル校との交流

小学部はインターナショナル校と毎年交流会を行っている。高学年は本校への来校と相手校への訪問、水泳記録会への招待と年3回交流を行っていた。

勤務1年目に相手校が来校したときはテーマを「日本の祭り・文化」とした。祭りを感じてもらうために、綿あめ機で綿あめを作ったり、水ヨーヨーを釣ったり、かき氷器を利用してかき氷を作ってもらった。大きな画用紙のカルタを使い、カルタ取りも行った。しかし、本校の児童がブースを担当しているために説明をするだけでそれ以上の会話をすることができなかった。後日訪問させていただいた時はドイツ語や鬼ごっこのような体育の授業、演劇のためのアイスブレイキングに取り組んだが、思うように親しくなることができなかった。

勤務2年目に同じインターナショナル校との交流が決まった。同じく高学年を組んだ教員に相談をし、「2人3脚」を取り入れた。インター校の子1人に本校の児童2～3人が付き添う小グループを作り、すべてのブースを同じメンバーで回った。紙飛行機の製作や水ヨーヨー作り、べっこうあめづくりの説明を相手にわかるように



交流先生徒とペアの2人3脚



現地学生との記念撮影

英語で行わなければいけないために、一生懸命に説明用の作文を作り、英会話の教員に添削をしてもらった姿も見られた。さらに2人3脚は、会話をせざるを得ない状況のためにわかりやすい単語を使い、何とか伝えようとする姿も見られた。グループに分かれ、リレー方式にしたことで、大いに盛り上がった。

そして、1年目と同じく訪問した際は相手校も同じ生徒と一緒に付き添ってくれて、以前の活動を思い出して話をする姿も見られた。笑顔で話をしている姿が言葉の壁を乗り越え、共同体験したことにつながりが深まったことを実感する交流会であった。

(2) マレー語講座

英会話の授業は授業カリキュラムに組み込まれているが、マレーシアの言語である「マレー語」を学習する機会が設けられていなかった。そこで勤務2年目に全校で「マレー語」の学習をする時間を年に1回設定し、マレーシアの工科大学（Universiti Sains Malaysia）で日本語を専攻している学生を招き、マレー語講座を開催した。小学部低学年は物の名前や数について、中学年以上は簡単な会話や受け応えなど生活で利用することができる内容とした。プレゼンテーションソフトを利用して教材を製作してきた学生もあり、児童生徒はとても意欲的に取り組んでいた。簡単な挨拶ができるようになったため、朝と帰りのあいさつだけでなく、食事の前と後のあいさつをマレー語で行うクラスもあった。現地を理解するための1番の近道は言語の習得ではないかと改めて感じた場面であった。

5. 終わりに

「現地理解」の授業をすることは児童生徒はもちろん、教師である自分自身がとても勉強になった。自分自身が理解していないと教えることができないために、準備など時間を費やすことで勉強になった。今でも片言しかマレー語を話せないが、マレー語で‘Terima kasih’（ありがとう）と言うと笑顔で店員さんが‘sama - sama’（どういたしまして）と返してくれた時、言葉が伝えられたことに対してうれしくなり、心の中で「よしっ！」と思ったものである。児童生徒の中にもこのような経験や思いをすることで、もっと知りたいという思いやさらに話せるようになりたいとの学習意欲を向上させ、他の文化を尊重しあう気持ちをもつ児童生徒になってほしいと感じた。

また、3年間の派遣で、日本の学校以上に職員の協力の大切さを強く感じた。今まで比較的職員の多い学校で勤務していたため、自分の担当以外は関わらない自分もいた。しかし、今回教員人生で初めての小学校を経験し、そして職員も少なく何事も全員で協力しなければそれぞれの行事が成り立たないことを体験する中で、教員観が変貌した。

帰国後は海外で学んだ経験を活かし、他国の文化を理解し探求する児童生徒、協力し合う気持ちと行動が伴う児童生徒の育成を目指した教育活動に取り組んでいきたいと考えている。